〔研究ノート〕

『オーウェル著作集』全四巻（平凡社）翻訳点検

―― その2 ――

西村　徹

Vol. 2. 16「ロンドン通信」(pp. 47～54) は『パーティザン・レヴュー』1941年3月－4月号に寄稿したアメリカ人向けの通信であるが，その半ばあたりで，独ソ不可侵条約以後スターリン主義者のみならず多くの左翼知識人が変節してしまい，ドイツとの戦争において敗北主義者に変っている状況をつたえる。

たまたま来るべきナチスの占領という事態に目を向けての運動も着手されたが[1]，それはたしかにわれわれの大部分が所有している政治的書類をロンドン警視庁特別分局の手で処分される結果に終わってしまった。こういうことはすべて，一般の人たち[2]の態度とはいちじるしい対象[3]をなしている。なぜならば，彼らはイギリスが危機に瀕しているという事実に気づきもしなければ[4]，最後のどたん場まで，抵抗する決心さえしなかったのである。(p. 51：下線筆者)

There was also a move on foot, with an eye to the coming Nazi occupation, to get the Scotland Yard Special Branch to destroy the political dossiers which, no doubt, most of us possess. All this was in marked contrast to the attitude of common people, who either had not woken up to the fact that England was in danger, or were determined to resist to the last ditch. (p. 53)

下線1は「来たるべきナチスの占領を見こんだうえで，われわれの大部分が持っていてあたりまえ程度の政治的文書をことごとく，ロンドン警視庁特別分局の手で処分させようとする動きもあった」であろう。

下線2は，このような文脈の中で，日本語では「一般大衆」というだろう。下線3は，contrast の訳なのだから，日本語では「対象」でなくて「対照」と書くだろう。

下線4は誤訳としても罪深い誤訳だろう。読者はこれを，左翼知識人のことを言っているのだと思うだろう。つまり「彼ら」を左翼知識人だと思えば，それなりに意味が通るからだ。原文とはまったく違う作文を訳者はしたことになる。しかし「彼ら」は一般大衆であること，原文の上であまりに明瞭だ。そうなると，以下の記述は，知識人の敗北主義といちじるしく対照をなしているはずの一般大衆の態度も知識人といっこうに変わらぬことになる。話はまるであべこべで，ここは「一般大衆はイギリスが危機に瀕しているという事実に目ざめてもいないか，最後のどたん場まで抵抗する決意があるかのどちらかであった」ということ。大衆は鈍重だが容易に変節したりしないという，これはオーウェル読みならばお馴染の，オーウェルがずいぶんあちこちで書いているイギリス大衆論である。ろくにオーウェルを読まずにオーウェルを翻訳したりすると，こういうへまをやらかすことになる。

すぐつぎの段落はじめのところで，

> 私個人の考えでは，虚偽の宣伝文句や恐ろしい権力的雰囲気を内にはらんだ，人民戦線時代のあの自信に満ちた主戦論の風潮は，死滅してしまったようだ。しかしある種の落し穴は残されている。つまりだれも何をなすべきかを知らず，何事も着手されていないのだ。若い作家たちが彼らの世界を破壊されて，非常に若い者までが軍隊にはいっているか，紙の欠乏によって印刷物から遠ざけられている時には，いかなる文学「流派」の出現をも創造することはむずかしいであろう。（p. 51：下線筆者）

Personally I consider it all to the good that the confident war-mongering mood of the Popular Front period, with its lying propaganda and its horrible atmosphere of orthodoxy, has been destroyed. But it has left a sort of hole. Nobody knows what to think, nothing is being started. It is very difficult to imagine any new "school" of literature arising at a moment when the youngish writers have had their universe punctured and the very young are either in the army or kept out of print by lack of paper. (p. 53)

下線1は原文 all to the good がすっぽり抜けているので，抜けているものに下線の引きようがなくて全文に引いた。他の字句の訳も多少の手直しをして訳しなおすと「私個人の考えでは，虚偽の宣伝文句やおぞましい唯我独尊の雰囲気もろとも，人民戦線時代のあの鉄面皮な主戦論の風潮が死滅してしまったのはけっこう至極のことである」。分かりやすいように手直し部分に傍点を振った。

下線2。ここで hole を「落し穴」とするのは適当でなかろう。ずいぶんよくなったが，「いわばまだ埋まっていない穴は残っている」ということだろう。

下線3。はじめに出る「若い作家たち」と後出の「非常に若い者」とは，後の方が「非常に」とあって両者は別物だと分かるのだから，これでいいようなものではある。しかし最初のは young ではなくて youngish なのだから，youngish が young より年上であることを表す適訳はたしかになかなか見つからないけれども，翻訳の上で一苦労していただきたい，などというのはあまりにケチ臭いことであろうか。これはこの程度にとどめておくとして，「印刷物から遠ざけられている」では，われわれ戦中世代には経験上，読む本がない，としか受け取りようがない。せっかく書いても「印刷もしてもらえずにいる」の意であろう。

それに続いて高級文学雑誌はますます維持困難になっているが，がらくた

小説は莫大な発行部数を誇っていることが語られ，「ほとんど数百年も続かないだろうという文明の寿命に関する懐疑が発生しており」(p. 52) とあるが，原文は There is such a doubt about the continuity of civilisation as can hardly have existed for hundreds of years (p. 54) である。「ほとんど数百年にわたって，あったためしもないほどの，文明の寿命に関する強い懐疑が発生しており」というところであろう。

つぎの段落冒頭にくる「今まで述べてきた事柄のなかでさえ，空襲の深刻さを誇張しているかどうか私には疑問だ」の原文は I wonder whether, even in what I have said, I exagerate the seriousness of the air raids? なのだから訳に問題があるとは言えない。しかし誇張が過ぎたと思っているのか誇張し足りないと思っているのか，どちらなのか。困ったことに I wonder whether というときは，どちらかの思いがあってのことだ。「困ったことに」というのは I wonder というのがはなはだ曲者で，語法の上だけではどちらという決め手がないからだ。母語話者には分かる機微がわれわれには掴めなくて迷ってしまうことが，しばしばある。だから無理もないことではあるが，それでも訳者は責任をとらねばならないのだ。また，どっちつかずに逃げたようでも，日本語の機微から言えば，この訳のままだと「まだ誇張し足りぬように思う」の意に傾く。私自身にもためらいがないではないが，しかし，ここは「今まで述べてきた事だけでも，空襲の深刻さを大げさにいいすぎたのではないかという気もする」ということではなかろうか。文脈からして，本文に疑問符があるところからして，そして母語話者の確認をえたうえからして，そのように思う。

*　*　*

Vol. 2. 20「芸術とプロパカンダの境界」(p. 117) : The Frontiers of Art and Propaganda (p. 123) 冒頭の段落全文を掲げる。

文学批評についてお話しするわけですが，われわれが現在生きているこの世界では，[1]それは平和について語るように，ほとんど将来性がありません。現代は平和な時代ではなく，また[2]危機の時代でもありません。過去十年のヨーロッパでは，もっと古い文学批評 ── 実際，判断力のある，良心的で，公平な，芸術作品を本質的に価値あるものとみなす批評 ── は，[3]ほとんど不可能に近かったのです。（pp. 117～118：下線筆者）

I am speaking on literary criticism, and in the world in which we are actually living that is almost as unpromising as speaking about peace. This is not a peaceful age, and it is not a critical age. In the Europe of the last ten years literary criticism of the older kind ── criticsim that is really judicious, scrupulous, fair-minded, treating a work of art as a thing of value in itself ── has been next door to impossible. (p. 123)

下線1は間違っているのではないが，舌足らずでもどかしい日本語だ。「それは」というのは「文学批評についてお話しする」ことなのだから，「それは平和について語るのと同じく」とすれば少しはめりはりもあろうではないか。また，「ほとんど将来性がありません」などでなく，いま一歩踏みこんで「ほとんど何も生まれそうにありません」の方が具体性があろう。

下線2は，いったいどこからこんな観念が出てくるのか，まったく理解に苦しむ。「平和な時代ではな」いと言えば「危機の時代」にきまっているではないか。1941年4月のヨーロッパ，そしてイギリスがどんな状態にあったか。枢軸側がもっとも図に乗っていたのがこの年で，その一環として同年12月8日の真珠湾攻撃のあった年ではなかったか。世界の戦況からして「危機の時代でもありません」とは，どこをどう押せば，しかもオーウェルの口から出るのであろうか。「批評の成り立つ時代でもありません」というほか，ありようがなかろう。それ以後に書いているのは，まさにそのことではない

か。しばらくして訳者は critical attitude を「危機の態度」などとは言わずに「批評的態度」としているではないか。

ついでにいうなら下線3も「ほとんど不可能に近いものになっています」がよかろう。

直後の段落冒頭の

> もしも，われわれが，過去十年のイギリス文学を振り返ってみるならば，[1]文学というよりむしろそれは有力な文学的態度というべきでしょうが，[2]われわれの心を打つものは，それがほとんど審美的でなくなったことです。(p. 448：下線筆者)

> If we look back at the English literature of the last ten years, not so much at the literature as at the prevailing literary attitude, the thing that strikes us is that it has almost ceased to be aesthetic. (p. 123)

下線1については，そこまで言わずもと言われそうなことをあえて言うのではあるが，これを「もしも，われわれが，過去十年のイギリスの文学を振り返ってみるならば，それは文学というよりむしろ幅をきかせている文学的態度というべきでしょうが」と，「文学」の前に「の」を一字入れ，「それは」の位置を移動させることで，文意はさらに明瞭になろう。

下線2については「審美的でなくなったこと」が「われわれの心を打つ」はずがないと言いたい。ここは「驚くべきは」であろう。しばらくして出る文で A thing that strikes anyone who looks back over the last hundred years is that literary criticism worth bothering about, (p. 125) には訳者は「過去百年を振り返ってみて驚かされるのは」(p. 119：傍点筆者) と正しく訳しているではないか。しかし，その後の，literary criticism worth bothering about は「頭をわずらわすだけの価値ある文学批評」などと安物のコンピューターのようにではなく「問題にするにたる」がよかろう。それ

から六，七行おいて What now appears to us as aesthetic scrupulousness hardly existed. も「現在われわれから審美上良心的にみえるものは，ほとんど存在していませんでした」とあるが，scrupulous を辞書で引けば「良心的」が真っ先に跳び出してくるからというのでは身も蓋もなかろう。一工夫して「われわれの目に審美的な神経のゆきとどいたとみえるものは」だろう。

段落がかわって間もなくあらわれる It is from then that the notion of "art for art's sake" — a phrase very much out of fashion, but still, I think, the best available — really dates. の訳は「『芸術のための芸術』という観念 — もうすっかりすたれていますが，まだいちばん有効であると思われるこの観念が，実際に生じたのはこの頃です」となっているが，原文をちゃんと見れば分かるとおり，ダッシュの中で言っているのは，「芸術のための芸術」という文句（phrase）は「もうすっかりすたれた文句だが，まだいちばん使える文句」だということ。けっして「芸術のための芸術」という観念（notion）がすたれたとか，まだ使えるとかいうのではない。正しくは「『芸術のための芸術』— もうすっかりすたれていますが，まだいちばん使用に堪えると思える言いまわし — という観念が実際に生じたのはこの頃から」であろう。

同じ段落終わり近くに，1890年から1930年の間はヨーロッパは例外的に安定し，誰しも文明の永続を信じていたとし，「そして，そのような雰囲気があったればこそ，知的無関心，さらにはディレッタンティズムも可能だった」（p. 120）とある。原文は And in that kind of atmosphere intellectual detachment, and also dilettantism, are possible. しかし，ここで intellectual detachment を「知的無関心」とは言えまい。「知的無関心」とは今日の日本語の用法からすれば，当然知的関心を刺激するはずの事柄に対していっこうに関心を示さないという意に傾くであろう。「知的無関心」を知的，積極的に選択した無関心的態度と取るのは到底無理であろう。intellectual detachment は後者のごとき意である。したがって「社会的無関心」ならば，

それなりに意味をなしたであろう。つぎの21「トルストイとシェイクスピア」(p. 121：原文 p. 127) でも，23「文学と全体主義」(p. 129：原文 p. 134) でも detachment が出てきて，そこでは「孤立」と訳している。まだしもこの方がましだが，「孤高」「超俗」「超脱」，あるいは，もし名詞としても使う慣用がありうるとするならば「超然」というあたりに落ち着くであろう。

「無関心」では論理矛盾に陥って意味をなさなくなる例が，次段落にあらわれる detachment のばあいである。

> そういう環境では，無関心は許されますまい。だれも自分に至る死の病に美的関心を抱くことはできないはずです。(p. 120：傍点筆者)

> In such circumstances detachment is not possible. You cannot take a purely aesthetic interest in a disease you are dying from; you cannot feel dispassionately about a man who is about to cut your throat. (p. 126)

第一文では「無関心は不可能である」と言っている。第二文では，それゆえに「純粋に美的な関心を抱くことは不可能である」と言っている。つまり，いずれも不可能なものとして「無関心」と「関心」とは等価に置かれることとなる。この歴然たる自己撞着に気づきもしないのは，はじめに「無関心は許されますまい」などと都合のよい訳をして自分が欺かれてしまったために他ならない。どうも訳者は英和辞典の初っぱなに出てくる語義にとびつく癖があるようだが，それにしても「知的」と訳してみて，どうにも間が悪いぐらいは気づいてもよさそうに思う。その程度には日本語そのものにも気を使ってよさそうに思う。同類の，日本語の使い方のもどかしさを感じさせる例を，少し拾っておこう。

次の段落「政治的秩序」(political discipline: p. 126) は「政治的規律」がよかろうし，続く「当時，彼らの前にひらいていた唯一の思想体系」(The

only system of thought open to them at that time)。傍点を振ったところ，当節は「ひらかれていた」というのが日本語の正用法であろう。次の文中「独ソ協定によって粉砕させられました」は原文を示すまでもなく「粉砕されました」であろう。それからしばらくして Aesthetic scrupulousness is not enough, but political rectitude is not enough either. と，また Aesthetic scrupulousness が出てきて，「美的には良心的だからといって，それで十分ではありません」という前半の訳は，ここはこれでもよかろうが，前出の訳とそろえるなら「美学的に目くばりが行き届くだけでは十分ではありません」ぐらいか。後半「政治的に公正であってもまた十分とはいえません」の rectitude は「公正」では足りないだろう。「政治的廉直」というところ。

次の21「トルストイとシェイクスピア」(pp. 121～124) の中で一箇所だけ

> トルストイの主張の大筋は，シェイクスピアが，とるに足らぬ，浅薄な作家であるということです。彼には一貫した哲学がなく，[1]頭をつかうだけの思想も観念もなく，社会的・宗教的問題にも関心がなく，[2]性格や事態を理解する力がなく，しかも，[3]少なくとも暗示できる態度とみられるかぎりで，皮肉な，不道徳な，世俗的人生観をもっていたというのです。(p. 122：下線筆者)

> Tolstoy's main contention is that Shakespeare is a trivial, shallow writer, with no coherent philosophy, no thoughts or ideas worth bothering about, no interest in social or religious problems, no grasp of character or probability, and, in so far as he could be said to have a definable attitude at all, with a cynical, immoral, worldly outlook on life. (p. 128)

下線1はふたたび worth bothering about の登場だが，「頭をつかう」のは誰なのか，トルストイなのかシェイクスピアなのか，読者にはいまひとつはっきりしない。こういうとき翻訳者は読者の身になって吟味する必要があるだろう。前出の場合と同じく「問題にするに足る」でけりがつくはず。それにしても，このほか detachment とか aesthetic scrupulousness とか，繰り返し同じ文句が出てくると，その言葉遣いの背後に作者の息遣いのようなものを感じて翻訳者はなにほどか興奮をおぼえ，つい身を乗り出してぴたりと訳語をきめたいと思うものだが…。

下線2の「事態」は「性格」とのバランスを考えたものであろうから，この程度でやむをえないとも言えようが，やはり舌足らずにはちがいないので「性格を浮彫りにしたり事柄の見通しをつける力がなく」ぐらいまで和文和訳のサービスがあってよかろう。

下線3，definable を「暗示できる」はないものだ。「少なくとも明示できる態度を持つと言えるものならば」であろう。

*　*　*

23「文学と全体主義」(p. 129) の第一行「現代は危機の時代ではない」は20「芸術はプロパガンダの境界」(p. 117) の繰り返しだから「批評の成り立つ時代ではない」と改めるのは無論として，次段落に三度出る autonomous individual は「自主的な個人」より「自立する個人」が今日の日本語の自然であろう。また，最終段落 it may be no more than a pious hope (p. 137) の pious hope は「好意的な希望」(p. 131) ではなくて「祈りにも似た希望」であろう。

さて25「ウェルズ，ヒトラー，および世界国家」(pp. 133〜138)，最初の段落ではウェルズの，ヒトラーに対する見当ちがいな過小評価の文が引用されている。

「一九一四年に，ドイツ帝国の軍隊は世界に燦たるものであった。あのベルリンで金切り声をたてている欠陥児のあと，そういうものはもう存在しない。…にもかかわらず，わが国の軍事“専門家”たちはまだ現われぬ幽霊を論じている。彼らの想像では，それの装備は完璧であり，訓練は無敵である。時にそれは，スペインや北アフリカなどに決定的な“一撃”を加えるか，バルカン諸国を席巻し，ダニューブからアンカラ，ペルシア，インドへと進撃するか，あるいは“ロシア”を粉砕するか，ブレンネル山道を越えてイタリアへ“なだれ”込むはずである。数週間が過ぎる，そして幽霊はこれらのどれも実行しない —— ただひとつ，すばらしい理由で。幽霊はそこまで現れないのだ。幽霊のもっていた不十分な銃砲とか弾薬はほとんど運び去られ，イギリス侵攻というヒトラーの愚かな牽制作戦に浪費されたに違いない。そして，その未熟な急ごしらえの訓練は，電撃作戦もおさまったという徐々にひろがる認識の下にしぼみ，戦争は振り出しへもどりつつある。（p. 134：下線筆者）

"In 1941 the Hohenzollern army was the best in the world. Behind that screaming little defective in Berlin there is nothing of the sort. . . Yet our military 'experts' discuss the waiting phantom. In their imaginations it is perfect in its equipment and invincible in discipline. Sometimes it is to strike a decisive 'blow' through Spain and North Africa and on, or march through the Balkans, march from the Danube to Ankara, to Persia, to India, or 'crush Russia', or 'pour' over the Brenner into Italy. The weeks pass and the phantom dose none of these things — for one excellent reason. It dose not exist to that extent. Most of such inadequate guns and munitions as it possessed must have been taken away from it and fooled away in Hitler's silly feints to invade Britain. And its raw jerry-built discipline is wilting under the creeping realisation that the Blitzkrieg is spent, and the war is

coming home to roost”（pp. 139〜140）

下線1は「冠たる」を錯覚したのであろう。語呂はあったが筋違いというところ。

下線2は，ヒトラーに代わりうる者，あとを継ぐ者は，もはやいない，という意にしかとれぬが全然間違い。ヒトラーの背後に「そういうもの」すなわち世界に冠たるドイツ帝国陸軍など存在しないということ。改訳を示すまでもなかろう。

下線3は or ならば「〜か」で片づくと思ってのしくじり。「〜か〜か」では，どれかを選択するだけであって，読者は「いずれかをしかしないのであろうか。そんなはずはなかろうに」と戸惑う。軍事専門家の想像するところでは，時にその幽霊は「スペインや北アフリカなどに決定的な“一撃”を加えてさらに進むとか，バルカン諸国を席巻し，…インドへと進撃するとか，あるいは“ロシアを粉砕”するとか，…“なだれ”込むとかするはずである」（傍点筆者）とすべきであろう。

下線4は「それほどまでの幽霊は存在しないからだ」に訂正。

下線5は「運び去られ」ただけなら銃砲も弾薬も移動しただけで，なくなったわけではないから「奪い去られ」であろう。

下線6は，字面だけの意味なら come home to roost は「ねぐらに帰る」のだから，こういうことだろうが，ふくむところが脹らんで成句になっているのだから「振り出しにもど」るだけではおさまらない。投げたブーメランは戻ってきて自分を打つという意だから，「攻守ところを変えつつある」であろう。

中程に進んで，なんとも訳のわからぬ文章が出てくる。

われわれは，世界の再建について，いや平和について語る前に，かならずしもナチスの原動力と同一ではないが，たぶん「目のひらいた」快楽主義的な人々には全く受け入れ難い原動力となっている，ヒトラーを排除しな

ければならぬ。(p. 135)

Before you can even talk of world reconstruction, or even of peace, you have got to eliminate Hitler, which means bringing into being a dynamic not necessarily the same as that of the Nazis, but probably quite as unacceptable to "enlightened" and hedonistic people. (p. 141)

原文を見ずに読めば，ヒトラーは「かならずしもナチスの原動力と同じではない」ことになって，なにがなにやら訳が分からなくなる。むろん訳者も全く分かっていないことは明らかである。which が to eliminate Hitler を指すのであって Hitler だけを指すことなど文脈からしてありえない。先立つ部分もまるで芸のない訳である。改めると「世界の再建どころか平和などという悠長なことを口にする暇などもなしに，さっさとヒトラーをぶっ潰さないといけないのだが，そうなると，かならずしもナチスのものと同じではないが，『開明的な』そして快楽主義的な人々には，たぶんまるでナチスのものに劣らず容認しがたいはずの，一つの原動力を登場させることになるのだ」となろう。ついでながら，この「原動力」とは進歩派の忌避する patriotism のことである。

これほどの珍訳ではないが，次段落の「こうした考えが実際に照らしだすものは，すべてイギリスの隠れた事情にほかならない」(p. 135) も，れっきとした誤訳にはちがいない。All that this idea really reflects is the sheltered conditions of English life. (p. 141) がその原文だから，「こうした考えが実際に映し出しているのは，イギリスのぬくぬくと安全な状況にほかならない」ということであろう。

次段落のはじめのあたり「人生の闘争的，狩猟的ないしはからいばり的な面に，救い難い憎悪をいだいている」(p. 136) とあるが，「救い難い憎悪」の原文は an invincible hatred (p. 142) だから「頑強な憎悪」，あるいはせいぜい，「度し難い」なら，同義になるようでも救いがあろう。中程に来て

he is an absurdity（p. 143）を「彼は矛盾したものであり」（p. 136）としているが「理くつにあわぬもの」がよくはなかろうか。同段最後の文章 That he should finally win would be an impossible reversal of history, like a Jacobite restoration.（p. 143）を「彼が究極的にかち得ようとするものは，ジャコバイトの王位復活運動のように，歴史のとうていありえぬ逆転であろう」（p. 137：傍点筆者）としているが，傍点最初の部分は What he should finally win と読み違えたものであり，第二の部分は「運動」ではなく，実際の王位に復することであろう。したがって「彼が究極的に勝利するなどということは，ジャコバイトが王位回復を実現するのと同じく，歴史のとうていありえぬ逆転であろう」であろう。

その次の段落で「ウェルズが若かった頃，科学と反動との間の対比は間違うべくもなかった」（p. 137：傍点筆者）の原文は When Wells was young, the antithesis between science and reaction was not false.（p. 143）だから，「対比」などと訳の分からぬものでなく，はっきりと「対立」であろう。「科学と反動との対立は紛うべくもなかった」のである。

最終段落にきて

もしも，ウェルズ自身と同じ世代のなかから，彼に対して中和剤たり得る作家を選ばざるを得ない[1]なら，権力の悪しき声や軍事的「栄光」につんぼではなかった[2]，キップリングを選ぶかもしれない[3]。キップリングは，ヒトラーと，その点に関してはスターリンの，訴えるものを[4]，彼らに対する態度はともかく，理解したに違いない。（p. 138：下線筆者）

If one had to choose among Wells's own contemporaries a writer who could stand towards him as a corrective, one might choose Kipling, who was not deaf to the evil voices of power and military "glory". Kipling would have understood the appeal of Hitler, or for that matter of Stalin, whatever his attitude towards them might be.

（pp. 141～145）

下線1と2に文句をつけるのは難癖のように思われるかもしれぬ。間違いはないと反論もできる。しかし下線1の「ざるを得ない」は英語にも「ねばならぬ」とは別の言い方（例えば cannot but など）がある。また，「ねばならぬ」には「ざるを得ない」ほど切羽詰まった，そのくせ消極的な感じはない。むしろ積極的ですらあるだろう。ここは「もし選べと言われれば」というぐらいの感じだろう。下線2について「つんぼ」は差別語だなどときめつけるつもりはないが，deaf to は比喩としても事実としても，ある種の音声，音楽に対する感受不能を意味するものとして用いられる。なるほど日本語でも同じように使いもしよう。しかし日本語と英語とでは言葉の位相はかなりの程度にちがうはずだ。日本語の中でさえ，丸出しで使うときと，「つんぼ桟敷」と熟して比喩的に使うときとではずいぶんちがう。だから，ぶっきらぼうにそのまま置き換えるのではなくて，比喩としての意味合いにまで踏み込んで訳出するのが翻訳者の心ばえというもので，ここは「聞きとる耳がない」ということだろう。

下線3は「かもしれない」でなく「できるであろう」。

第一文全体を，せっかく Kippling と who の間にはコンマもあることだし，順序を少し変えて改訳すれば

> もしウェルズ自身と同じ世代のなかから，彼に対する中和剤となり得る作家を選べとあらば，キップリングを選ぶことにもなろう。キップリングには，権力の悪しき声や軍事的「栄光」を聞きとる耳がなくはなかったからだ。

下線4は，このままだと，はなはだ分かりにくい。「その点に関しては」などと辞書を丸写しされても，どの点に関してか，さっぱり分からぬ。まともな日本語ならば「ヒトラーの，または実際上スターリンの訴えるもの」で

あろう。

*　*　*

Vol. 2. 27「ドナルド・マックギルの芸術」(pp. 147〜158) で，漫画絵葉書に記されたジョークのうち，しゃれのきいたものの例をいくつか挙げているが，そのうちのひとつ，

「ぼくは経験してる女の子を家まで送ってやるのが好きなんだ」
「あら，あたし経験なんかしてないわ」
「なんだ，まだやったことがないのか」(p. 149)

"I like seeing experienced girls home."
"But I'm not experienced !"
"You're not home yet !" (p. 156)

こうなると，あまりに原文とかけ違っていて，誤訳そのものがジョークの種になりそうだ。また，たしかに外国語のジョークはなかなか分からないのも事実である。しかし，ほんとうに語学力がしっかりしていれば，ここまで間違わずにすむという側面も，やはり，ある。experienced のような過去分詞形が形容詞として使われるとき，ただ「経験している」というだけの中立的意味ではなく「経験ゆたかな」とか「海千山千」とか，積極的な意味になるのは知れたことと思うが，案外知らぬ人が多いようだ。大学入試問題の模範解答が新聞に出て，高校の，それこそ experienced teacher が書いている回答で，これを間違えていたりする。だから同情はするが，これを間違えたのが最初の躓き。あとはもうむちゃくちゃの妄想。どだい，これでは genuinely witty にはほど遠かろう。三行目は「まだ家に着いちゃいないぜ」ということ。しゃれの説明をくどくどする必要はなかろう。ただし一行目の

傍点は当然抹消。

つぎなるは

「わたし，この数年毛皮のコートを買おうと思って奮闘してるのよ。あなたはどうやって手に入れたの」

「私は戦闘をやめたのよ」（同前）

"I've been struggling for years to get a fur coat. How did you get yours ?"

"I left off struggling." (Ibid)

これはまあ，まるきり分からぬではない。日本人たるもの，これが分からないで翻訳など読めるか，ということかもしれぬ。それにしても，すぐには分かるまい。「奮闘」を「戦闘」に変えたところで変わりばえはしない。それどころか，かえってそのままにしておけば，むしろその方がよかったろうに，こんなことをするから，やっぱり訳者は分かっていない，ということが分かってしまう。いっそ「がんばってるのよ」と「がんばるのをやめたの」，あるいは「突っぱってるのよ」と「突っぱるのをやめたの」あたりだろう。

ずっと先にいって，

たとえば『エスクワイヤー』，あるいは『パリの生活』などの新聞では，[1]その冗談の背景を想像してみると，それは常に[2]ごたまぜの状態であり，あらゆる基準の完全な崩壊状態であるのに対して，マックギルの絵葉書の背景は結婚である。おもな笑いの種は，裸体，私生児，オールドミス，新婚夫婦の四つであるが，このうちどれを取っても，ほんとうに放縦な社会，[3]あるいは「すれっからした」社会においてさえ，おもしろくは感じられないだろう。(p. 152)

Whereas in papers like *Esquire*, for instance, or *La Vie Parisienne*, the imaginary background of the jokes is always promiscuity, the utter breakdown of all standards, the background of the McGill post-card is marriage. The four leading jokes are nakedness, illegitimate babies, old maids and newly married couples, none of which would seem funny in a really dissolute or even "sophisticated" society. (p. 159)

長ながと引用した割に言うべきことは少ないのではあるが，まず下線1の imaginary は，こちらが想像してみることも，むろんできるにちがいないが，それより先に「ジョークのすべてが想定している背景は」であろう。下線2の「ごたまぜの状態」では，いっこうに具体性がなく，なにがごたまぜなのか分からない。男女がごたまぜの関係にあることだから，はっきり「乱交」であろう。下線3の「すれっからした」は sophisticated の訳語としては不粋にすぎようし，またこれでは「放縦な社会」との距離も計りかねよう。これはむしろ「垢抜けた」とか「洒脱な」というほどの意であろう。したがって下線3は「いや『洒脱な』という程度の階層社会においてさえ」というところか。

さて次の28「まさに，だれひとりいない」(pp. 158～163 : *No, Not one.* pp. 165～171) の初っ端，

マリ氏は数年前，ジョイス，エリオットなど，最もすぐれた現代作家たちの作品は，単に，今日のような時代にあって偉大な芸術の全く不可能なことを示しているに過ぎないと述べている。(p. 158 : 下線筆者)

Mr. Murry said years ago that the works of the best modern writers, Joyce, Eliot and the like, simply demonstrated the *impossibility* of great art in a time like the present, (p. 165)

この訳者はよくよく「過ぎない」が好きなようだが，merely のばあいはともかく simply まで同断とは恐れ入るほかない。simply は「単に～過ぎない」どころか，その逆で強意表現だということ，つまりは「ひとえに」「ひたすら」「もっぱら」と，他を排除しているのだということ。simply because I love you という歌の文句が「単にあなたを愛しているからに過ぎません」では話になるまい，などという例を挙げて大学の英語教師などが口を酸っぱくして言うことのはず。「まさに…にほかならない」であろう。ついでに言うなら years ago を「数年前」も困るだろう。year とか day とかweek とか，こういう名詞が無冠詞複数のときは many が含意されるとは月並な英語辞書にも出ていよう。「なん年も前に」だろう。

ちなみに強意表現の simply はこの篇だけで四箇所に現われる。一箇所だけ「単に～だけである」と半分だけあっているが，他はいずれも「単に～過ぎない」と全く間違っている。それが出てきたら「全く～他ならぬ」と訂正すればよいわけだから，いちいちには触れない。

些細なことながら第二段落 just in time to escape the massacre は「大虐殺をうまく免れて」より「大虐殺を辛うじてまぬがれ」がよく，Low Countries は，ただの「北海沿岸諸国」ではなく「北海沿岸低地帯諸国」か「ネーデルランド」がよかろう。

第五段落末尾の文「暴力を放棄するためには，当然，それの経験があってはならぬのだ」も To abjure violence it is necessary to have no experience of it. (p. 167) という原文の意からはずれているだろう。だいたい「それの経験」などという珍妙な日本語は願い下げにしたい。段落末尾の文というのは，しばしばアフォリズム風の思わせぶりになるものなのだ。「暴力を避けるには暴力を知らぬことが必要だ」ぐらい思い切ったほうがよい。

次の段落も末尾の文章が問題。

そして何よりも第一に，今まで通り，研究者としての地位が，つまり，究極的には，たとえ暴力のおどしでゆすられないとしてもただちに停止さ

れる配当で暮らす恵まれた人間という状態が，相変わらず続くのである。(p. 160：下線筆者)

And underlying everything there will still be his position as a research-worker, a favoured person living ultimately on dividends which would cease forthwith if not extorted by the threat of violence. (p. 168)

「ただちに停止される配当で暮らす」のがなぜ「恵まれた人間」なのか。この文章の訳だけをいくら読んでも分かるまい。「ゆすられないとしてもただちに停止される」というのも，なんのことやらさっぱり分からぬ。if not はいつでも譲歩だと思いこんでしまって間違ったのだろうが，それでつじつまが合わないのだから考え直すのがあたりまえではないか。先立って「中産階級の一員として，自ら選んだ仕事を続けていくかぎり，彼も，究極的には他の人々の下降（degradation だから「沈淪」とか「零落」の方がよかろう ── 筆者）の上に寄食している数百万の恵まれた人間のひとりである」とあるから，下線部分は「暴力のおどしでしぼりとりでもしなければ忽ち途絶えてしまうような利息で暮らす恵まれた人間」となろう。つまりサラ金業者が暴力的に利息を取立てるように下層の労働者から搾取して得られる金利によって暮らす階級ということであろう。暴力的搾取がなくなれば金利は忽ち停ってしまうということであろう。

さて次段落半ばに，

われわれは平和主義者であることを主張しなければ，[1] 明らかに[2]親ナチス派になり得るかもしれぬが ── しかもわが国では，口にするだけの勇気のあるものは少ない[3]とはいえ，きわめて強力なナチス擁護論が存在するのだ ── もしもさらに，六月粛清以降のどのような恐怖も，イギリスにおけると全く同様の恐怖によって帳消しにされると主張するなら，[5] ナチズムも資[4]

本主義的民主主義も，似たり寄ったりのものであると主張せざるを得ないだろう。実際に，これは選択と誇張によってなされるべきである。（p. 166：下線筆者）

You can be explicitly pro-Nazi without claiming to be a pacifist — and there is a very strong case for the Nazis, though not many people in this country have the courage to utter it — but you can only pretend that Nazism and capitalist democracy are Tweedledum and Tweedledee if you also pretend that every horror from the June purge onwards has been cancelled by an exactly similar horror in England. In practice this has to be done by means of selection and exaggeration. (p. 168)

この訳文は筋違いのまま，それなりに筋が通っているので始末が悪い。もっとも筋が通っているといっても下線4は削除しないと筋も通らぬ。単なる印刷ミスに過ぎないのだろうが困ることには変りがない。ついでに些細な訂正をしておくと下線2は「おおっぴらな」，下線3は「多くはない」にするのがよい。さらに注釈を加えておくと「六月粛清」というのは34年6月のヒトラーによるレームらＳＡに対する血の粛清のことであろう。

さて，どうして筋を違えてしまったかというと，一つには文脈無視，一つには文体無視ということになろう。文体は原文を見れば分かるように，じつにむだのないもの。文脈は少々説明の必要があろう。これは元々が平和主義非戦論に対する批判を展開している文章で，ナチスに対するイギリスの戦いを妨げようとする平和主義者は客観的には親ナチスである，というオーウェルの説がまずあって，引用部分直前では，ドイツもイギリスも暴力装置としての国家の本質に大差ないと平和主義者は言うが，イギリスにドイツからの亡命者が六万人もいるところをみると両国に大差はなくとも差のあることは間違いないとし，それならば少しでもましな方が勝つことが望ましいという

ことになり，平和主義非戦論は全く立場を失ってしまうと述べられている。それを受けてのこの引用部分だから，かなり皮肉な調子で，平和主義は立つ瀬がなくなったが，なにもわざわざ「平和主義者を名乗らなくても，おおっぴらに親ナチス派にはなれようが」といったところ。そしてダッシュのあとは「それにしても六月粛清以降のあらゆるおぞましい出来事は，イギリスにおける全く類似のおぞましさによって帳消しにされているなどと，（そんなでたらめを）ぬけぬけと言い張ることもできてはじめて，ナチズムも資本主義的民主主義も似たり寄ったりだなど，ぬけぬけと言い張ることができるというにとどまる」というのである。下線1の claim も，下線5，6の pretend も，まさしくミソもクソもいっしょくたの「主張」では粗雑というもおろかであろう。そこまでがこの程度に分かれば下線7の「実際にやる上で，こんなことは選り抜いたり誇張したりしてやるしかないことだ」も分かるというもの。むだのない文章は，よほどしっかり読みとらないと足をすくわれる。

これにすぐ続くところも多少の手直しをした方がよさそうだ。

現にカンフォート氏は，「悲惨事」を典型的なものと主張している。いわゆる民主主義国家におけるこのドイツ人医師の苦難は，ファシズムに対する闘争を道義的に正当化するものまですっかりなくなってしまうほどきびしい，と彼はいう。(p. 161)

Mr. Comfort is in effect claiming that a “hard case” is typical. The sufferings of this German doctor in a so-called democratic country are so terrible, he implies, as to wipe out every shred of moral justification for the struggle against Fascism. (p. 168)

これはこれでがまんできる訳にはなっているので，どこがどうと言わず，こうしてくれたらもう少しよかろうにというところで全文を示しておく。

カンフォート氏は，ひとつの「苛酷な事例」を典型的なものとして主張していることになる。いわゆる民主主義国でのこのドイツ人医師の苦難の数々は，反ファシズム闘争の道義的正当化などいっさいけしとばしてしまうほどきびしい，と彼は言いたいらしい。

in effect とか implies とかも無視はしない方がよいというまで。

次段落半ばの「それが少なくとも主張し得る立場なのである。それは，われわれ自身の生存期間をこえて，人類の歴史を，考えることである」（p. 162）：That is at any rate a tenable position. It looks forward into human history, beyond the term of our own lives.（p. 169）は「それは少なくとも筋の通った立場である。それは，われわれ自身の生存期間をこえて，人類の歴史を読みこんでいる」（傍点筆者）とすべきもの。

次段落冒頭，

暴力に従うことによってともかく暴力を打ち負かすことができるという考えは，[1]単に事実からの逃避に[1]過ぎない。すでに述べたように，それは[2]おのれと現実との間に，富と鉄砲をもっている人々にとってのみ，可能なのである。だが，いったい，なぜ彼らは，とにかく，このように逃避したがっているのか？　それは，[3]正しく暴力を憎み，それが近代社会[4]にとって必須のものであり，彼ら自身の高尚な感情と上品な態度とが，すべて力によって[5]与えられた不正の[6]結果にほかならぬことを認めようとしないからである。（p. 162：下線筆者）

The notion that you can somehow defeat violence by submitting to it is simply a flight from fact. As I have said, it is only possible to people who have money and guns between themselves and reality. But why should they want to make this flight, in any case? Because, rightly hating violence, they do not wish to recognise that it is inte-

gral to modern society and that their own fine feelings and noble attitudes are all the fruit of injustice backed up by force. (p. 170)

下線1は既に指摘済みではあるが，せっかく偶々本文から出てきたので「まったく～ほかならぬ」であることを繰返しておく。さて下線2の「おのれと現実との間に，富と鉄砲をも」つとはどういうことか。訳者自身はほんとうにその意味を了解しているのであろうか。了解しているのなら，なぜ読者にも了解可能となるように工夫しないのか。それがないのは了解していないと見るよりほかない。これは「おのれを現実から護るべき富と銃砲」であろう。下線3は「正しく暴力を憎み」とあるからは，正しからざる暴力の憎み方もあるのであろうか。あるかもしれぬが，なぜここで，わざわざ，暴力を憎むのに「正しく」と限定するのであろうか。ここは「暴力を憎むのは正しいとして」であろう。下線4，6はこれほどひどいものではない。間違いですらなかろう。ただ4は「にとって不可分」が，6は「果実」が，より適当であろうというまで。下線5は「与えられた」でなく「支えられた」であろう。

大詰に来て，またちょっと首を傾しげたくなる訳が登場する。

弁護論が全く存在しないということは，ヒトラーを攻撃することであると同時に，現にわれわれを彼の手にかからせまいとしている人々を見下すことになろう。それは単に，資本主義の崩壊期の産物であるイギリス的偽善の，高踏的な一変種に過ぎない。しかもそれは，少なくとも警察官と利益配当の本質を理解しているヨーロッパ人たちにとって，当然軽蔑されてしかるべきものであろう。(p. 163：下線筆者)

What there is no case for is to denounce Hitler and at the same time look down your nose at the people who actually keep you out of his clutches. That is simply a highbrow variant of British hypocrisy, a

product of capitalism in decay, and the sort of thing for which Europeans, who at any rate understand the nature of a policeman and a dividend, justifiably despise us. (p. 170)

致命的なのは第一文で，以下は拙劣というにとどまる。下線1の，この文の主語「弁護論が全く存在しないということ」，何者のための弁護論にせよ，そういうものがないということが，いったいどういう筋道を辿って「ヒトラーを攻撃する」ことになるのやら，また「人々を見下すことに」なるのやら，なんのことやらさっぱり分からない。これは「まったく弁護の余地のないのは」であろう。下線2は「攻撃することであると同時に」ではなくて「攻撃すると同時に」であろう。したがって第一文は「まったく弁護の余地のないのはヒトラーを弾劾しながら，同時に，現にヒトラーの手中に落ちぬようにわれわれを守ってくれている人々を見下すことである」ということであろう。下線3は，またしても出てきたが「単に～過ぎない」は「まったく～ほかならない」であるというまで。しかし，ここの「それは」は，上に記されたような「弁護の余地なき態度」だから，「それは」でなしに「そういう態度は」がよいだろう。そのあとは「しかもヨーロッパ人たちは，少なくとも警察官と利益配当の本質を弁えているから，当然われわれを軽蔑してしかるべき理由となるものであろう」の方がすっきりしないか。

ついでながら注(1)の「自然に帰れ」(p. 163) は「農に帰れ」("back to the land", p. 165)が正しい。

*　*　*

だいぶ先に進んで32「イギリスの危機 ── ロンドン通信」(pp. 195～204 : The British Crisis : London Letter to *Partisan* Review, pp. 207～216) の中に「ロシアとの同盟」(THE RUSSIAN ALLIANCE) という節があり，その中で，

独ソ不可侵条約と別の裏切りの恐怖が，もっと緊密な同盟に対する彼らの執着を部分的に説明しているということが全く忘れ去られてしまったとは考えられない。(p. 202)

I think people have not altogether forgotten the Russo-German Pact and that fear of another double-cross partly explains their desire for a closer alliance. (p. 214)

原文だと，いとも単純明快な文章で，ほとんど一息に読んでしまえるが，訳文はもたもたと風通しが悪くて，二度三度読み返してはとつおいつ，結局もうひとつはっきりしない。それもそのはずで，「独ソ不可侵条約」と「別の裏切りの恐怖」との二つを explains という単数動詞の主語にしてしまったというお粗末から何もかもが狂ったというわけ。「国民は独ソ不可侵条約のことをすっかり忘れたわけでなくて，またしても裏切られるかもしれぬというその不安が，もっと緊密な同盟に対する彼らの執着を部分的に説明しているのである」というのが最小限の訂正を加えた改訳となる。

それから一文おいて，次の文

私は前の通信で行ったビーヴァブルック系新聞に対するもってこいの言及をいくつかここでむし返さなければならない。(p. 202)

I must take back some of the favourable references I made in earlier letters to the Beaverbrook press. (p. 214)

これはこのまま意味が通じるから，つい読み過ごしそうになりつつ「もってこいの言及」になにやら痞える感じがあって，ふと原文を見て，これはこれはとなった。ことわっておくが，テキストすべて逐一根掘り葉掘り調べているわけではなく，読み通していって読みが通らぬところで立ちどまる，と

いう具合のしごとだから読み過ごしているところもまだまだあるはず。どうも，この「パーティザン・レヴュー」に寄稿した「ロンドン通信」は，ことによると，もっと綿密に調べる必要がありそうにも思う。しかし，ひとまずは一通りのことにして，いずれ暇を見てということにする。

これは take back と favourable が間違っていること，原文を見れば一目で分かる。「私は前に書いたいくつかの通信の中でビーヴァブルック系の新聞について好意的なことを言ったが，中に撤回しなければならぬものもある」であろう。撤回を要する好意的言及の一例は32「ロンドン通信」（p. 107）に出ている。

つぎは34「平和主義と戦争」（pp. 207～217：Pacifism and the War, pp. 220～230）。これはオーウェルの平和主義批判に対する平和主義者の反論とオーウェルのまとめが内容。

> オーウェル氏が「客観的には親ドイツ」と本気で言っていると仮定しよう（もしそうならば，彼の不正確な用語はたしかにきわめて不正確な考え方を表わしている）。「客体」はだれなのか？ ── 闘争の特定の一方の支持者である，オーウェル氏なのか？　こういう論法にしたがえば，ドイツや日本の平和主義者は，「客観的には親イギリス」となるだろう。これはたわごとである。オーウェル氏は，平和主義者に狂信的愛国主義（ショーヴィニズム）への偏向があると見ている。（p. 208：下線筆者）

> Let us assume that Mr. Orwell means “objectively pro-German”. (If so, his loose terminology is surely indicative of very loose thinking.) Who is “objective”? ── Mr. Orwell, a partisan of one particular side in the struggle? According to this type of reasoning, a German or Japanese pacifist would de “objectively pro-British”. This is puerile. Mr. Orwell is assuming that the pacifist shares his chauvinistic predilections. (p. 220)

問題になるのはただの二箇所ではある。しかし下線1「客体」などと言って意味が通じるものか考えてみたのであろうか。前後二度も「客観的」と言っておきながら，なぜここでも「客観的」とは，としないのか。下線2は「平和主義者にも彼とおなじく」とすべきであろう。his chauvinism の his を放ったらかしてよいわけではなかろう。手抜きはよくない。

それから少しして，「オーウェル氏その人は，ことにつけ，政治家的な考え方をする『政治家』である」(p. 208：傍点筆者）という。「ことにつけ」とはどういうことか。私はこのような日本語を知らぬ。「雨につけ風につけ」とか「良いにつけ悪いにつけ」というような「つけ」の接続助詞としての用法はある。「何につけ」ともいうから，あるいは「事につけ」というのも，ひょっとしてあるのかもしれぬが，こんな耳慣れぬ言葉をなぜわざわざ分かりにくく，ひらがなで書くのだろうか。原文の Mr. Orwell is himself a "politician", with a politician's outlook on things. (p. 221) を見れば on things のことらしいと分かりはするが，それならば「何事につけ」とか「何かにつけ」と言ってくれれば面倒はなかったろうにと思う。やはりこれは舌足らずな日本語というほかない。あるいはそういう方言があるのだろうか。もしそうならば脱帽する。

次段落冒頭に「たぶん，私は，オーウェル氏がこの問題を提起した以上，われわれ平和主義者の多くが，ドイツとわれわれ自身の関係について感じているものを，言葉に表わすべきなのだろう」(p. 209：傍点筆者）という一文。なにひとつ間違っているというのではない。しかし「私は」というこの文の主語がこんなに早くとび出してしまうと，すんなり「言葉に表すべきなのだろう」という述語部分につながりにくい。途中に「われわれ平和主義者の多くが」などと紛らわしい文句があるので戸惑う。原文ではすんなり，この二つが直結していて，そういう恐れは全くない (Perhaps I ought to try and give expression to what many of us pacifists feel about Germany in relation to ourselves, since Mr. Orwell brings up this point. p. 221)。こういうとき翻訳者はただ機械的に言葉を移しかえればすむというものではな

い。言葉の並び具合いにも気を配るのが当然であろう。そして原文との乖離を可能なかぎり少ないものにすべきであろう。このばあい事は簡単で「私は」を「言葉に表すべきなのだろう」の直前に移動させればすむ。これはもはや揚足取りだなどとはいうべきでない。むしろ本来の翻訳批判とはこのような水準で行われるものである。ちょっと先の「心情的に政府と妥協することさえ恥としている」（p. 209：傍点筆者）の「心情的に」も困るだろう。would scorn to mentally compromise themselves with the Government. (p. 221) とあって mentally は「観念的にさえ」だろう。またちょっと先に

> 私は，むろん，単に自分のことだけを言っているのではないのだが，[1] たしかに「民主主義の擁護」は，民主主義をイギリスと同一視したり，さらに立派に ── 「イギリスのため」── 戦えるようにあらゆる民主主義を破壊させることなく，[2] われわれ自身の具体的な自由を守ることによって，始めて果たされるのである。（p. 209：下線筆者）

> I can only speak for myself, of course, but surely the "defence of democracy" is best served by defending one's own concrete liberties, not by equating democracy with Britain, and allowing all democracy to be destroyed in order that we may fight better — for "Britain"; (p. 221)

下線1の「単に～ではない」は原文のどこから出てくるのだろうか。いくら読んでみても，その逆にしか読めないではないか。「私個人の見解であるのはむろんだが」としか読みようはないはず。下線2は，これまた手抜きしないで「あらゆる民主主義を破壊されるにまかせたりすることなく」とすべきであろう。

次段落で，またもや「果たして誰が主張し得るだろうか？」（同ページ）と pretend をただ「主張する」と訳しているのは，そもそもこれが手抜き

であること前述したとおりである。次ページ第一行の「主張」(The pretence) も同断。手抜きであるだけでなく，手抜きによる誤訳なのである。少しいって「オーウェルの言及した,平和主義者たちによるヒトラーの『擁護』とは，単に,ヒトラーとドイツが真に歴史的な動力を内蔵しているのに対し，われわれにはこれがないという，われわれの認識にほかならない」(p. 210：傍点筆者： The pacifists' "championing" of Hitler referred to by Orwell is simply a recognition by us that Hitler and Germany contain a real histotical dynamic, whereas we do not. p. 222) は「単に」を削除,「認識」を「認識を指すもの」としてできあがり。少しとんでアレックス・カンフォートの書いた文章で「言論界を調査し」(p. 213) は sitting on the press (p. 225) だから「新聞を押さえこみ」だろう。

次段落のはじめ,

> さらに繰返せば，オーウェル氏は，占領地帯の芸術家の果たすべき役割をいったいどう考えているのか？　彼は，力のあらんかぎり，可能なところ，可能な時に，目にはいる悪に対して抗議すべきである ── ところが，現状を一時的にせよ容認することによって，あるいはポケットを手榴弾でふくらませてエッピングの森（割注略 ： 筆者）で小ぜり合いすることによって，もっと有効にこれを行うことができるのだろうか？ (p. 213：下線筆者)

> What, again, does Mr. Orwell imagine the rôle of the artist should be in occupied territory? He should protest with all his force, where and when he can, against such evils as he sees — but can he do this more usefully by temporarily accepting the *status quo*, or by skirmishing in Epping Forest with a pocket full of hand-grenades? (p. 225)

現状容認と手榴弾で戦うこととは正反対の行動選択のはずなのに，どっち

でもいいけどどっちか選んで，というのはどういうことなのか。それによって，何との比較で「もっと有効に」なのか。まるで分からぬ奇体な日本語である。またしても原文を読めば一目瞭然。現状容認と手榴弾と，すなわち戦うのと戦わないのとどっちが有効か，と問うているのだ。つまりこれは「より有効にこれを行うことができるのは，現状を一時的にせよ容認することによってなのか，あるいはポケットいっぱいの手榴弾をもってエッピングの森で小ぜり合いすることによってなのだろうか？」とでもすればいいようだ。

つぎはオーウェル自身のまとめの文章。その中で「独裁政府は永久に，『道徳力』の立場に立つことができる。彼らがおそれるものは物理的力である」（p. 214 : Despotic governments can stand “moral force” till the cows come home; what they fear is physical force. p. 227）とあるが，あとで「物理的力」といっているのでもあるから先のほうも「道徳的力」がよかろうし，stand は「がまんする」の意だから，「立場に立つことができる」は 道徳的勢力なら「許容できる」がよかろう。

同段落末尾，カンフォートを引用しているところで

> われわれには，不幸が大きくなればなるほど，人間の想像上もしくは実際の悲劇の実現にとって戦争を災難であるとみなす孤立した解釈から，想像的作品がますます急激に増し，また，詩の急激なカタルシスも大きくなるように思われる。(p. 215)

> One can imagine the greater the adversity the greater the sudden realisation of a stream of imaginative work, and the greater the sudden katharsis of poetry, from the isolated interpretation of war as calamity to the realisation of the imaginative and actual tragedy of Man. (p. 227)

この日本語を，それがどこでどう間違ったかをほぐして筋道立てて説明す

るのは相当厄介である。構文をこれだけ混乱して把える訳者の非論理性に付合えるほど私は頭がよくはない。私の能力に余ることは諦めて，そのかわり，私はこう読むというところを示すにとどめる。原文は二つのコンマによって三つの部分に分かたれる。それぞれをA，B，Cとする。A，B，Cいずれも the greater the adversity に対応する。the sudden realisation も the sudden katharsis も，そのありようは状況補語としてのCによって説明される。つまり～から～へ（from ～ to）の過程を辿る。私は頭が単純なので，そのように算術的にしか把えることができない。そこで，こんな訳になる。

非運がつのればつのるほど，滔々たる想像的作品の急激に成就される勢いはますますつのり，詩の急激なカタルシスの力もつのって，戦争を災いとのみ見る孤立した解釈から，想像的および現実的な，人間の悲劇の成就へと進むものと想像される。

つぎの段落で，

それは，戦争のプロパガンダのように，[1]「実情」をもちだして，相手の見解をぼやかし，やっかいな質問を避けるのに力を集中する。[2]当然そのあとに続く文章は「ファシズムに対して戦う人たちこそファシストになる」[3]のである。これに対して[4]生じる全く明白な[5]反対をうまくのがれるために，つぎのようなプロパガンダのトリックが使われる。

一，戦争の結果としてイギリスに起こった[6]ファシズム化の過程は故意に誇張されている。(p. 215：下線筆者)

Like war propaganda, it concentrates on putting forward a “case”, obscuring the opponent’s point of view and avoiding awkward questions. The line normally followed is “Those who fight against Fascism go Fascist themselves”. In order to evade the quite obvious objections

that can be raised to this, the following propaganda-tricks are used:

1. The Fascising processes occurring in Britain as a result of war are systematically exaggerated. (p. 228)

ここは単純に部分的訂正ですむ。1は「訴訟弁論一本槍で」，2は「通常」，3は「となる」，4は「提起されうる」，5は「異議」，6は「ファッショ化」である。6はどう違うか分かりにくいかもしれないが，「ファシズム化」ならば fascistization という語に対応する。日本語でも「右翼化」と「右傾化」はちがうようなもの。

最終段落で，

私は今にいたるまで「知識人」もしくは「インテリゲンチャ」なるものを攻撃[1]したことはない。私自身，膨大なインクを使って，イギリスにはびこっている一連の文学的徒党[2]を攻撃することによって非常に傷ついている。(pp. 216～217：下線筆者)

I have never attacked "the intellectuals" or "the intelligentsia" *en bloc*. I have used a lot of ink and done myself a lot of harm by attacking the successive literary cliques which have infested this country, (p. 229)

1は *en bloc* の訳が脱け落ちているので，「攻撃」の前に「ひとからげにして」を入れる必要がある。2は，「イギリスにはびこっている」は have infested this country の，「一連の」は successive の訳のつもりらしいが，ここは「つぎつぎ現れてはこの国を毒してきた文学的徒党」であろう。

（つづく）

(1989. 10. 5 受理)